

## Special Essay

## 教科書も読み物

眼科学講座 門田 遊

今年の仕事始めは医学科4年生のシラバス作りから開始した。これまでのシラバスは詳細すぎて、学生が教科書を読む必要がなくなったと感じているとの事で、改訂が必要となった。今年のシラバスは、要点のみ記載してあとは教科書で勉強するよう教科書のページ数を入れておくようにとのことだった。

私が学生だった頃は、シラバスはなかったので、授業中にノートをとる、そして試験前にはまず教科書を読んでいた。授業中はわかった気になっても、時間が経って自分のノートを見ても脈絡がないため、わかりにくい。そこで先に教科書を読む。教科書には、「序」の項があるが、私はまず「序」を読んでいた。例えば、現代の眼科学改訂第9版の「序」には以下の文章から始まる。「“見える”ということはいったいどのようなことであろうか。ものを見るとき、はっきり見分けることのできる人とそうでない人がある。人は色を判別する能力をそなえ、さらに暗いところでも物体を見ることができ、またある拡がりをもつ範囲を見ることがもできる。遠いものも近くにあるものも自然にピント合わせがなされる。われわれは2つの眼で物を見ているが、見える物体の像は決して2つにだぶって見えることはなく、しかも立体的にみえる。」このような「序」を読むと、眼科学というものを理解しようという気になる。

また、標準組織学総論第3版の「序」では以下の文章から始まる。「15世紀にイタリアを風靡した“生体をありのままに観察する”というリアリズムの精神は、1543年 Andreas Vesalius の *Fabrica* とよばれる見事な人体解剖図において開花する。」このように、教科書の「序」を読むと、読み物として読んでみようという気になる。その後に教科書の総論を読むと、さらにその教科の全体像が浮かんでくる。最後に各論を読んでゆく。ノートと違い文章で説明が書いてあるので理解しやすくなっている。教科書を読んでからノートを見るとポイントがよくわかり、頭に入りや

すい。

今年からのシラバスはこのノートに当たるものを作成するということだろうと思う。学生の中で、このエッセイを読んで、教科書を「序」から読んでみようと思われた方が1人でもいれば幸いである。

